

第1分科会記録

「アクティブ・ラーニングを通じた資質・能力の育成」一次期学習指導要領の改訂の動向を踏まえた知的障害教育の展開―

話題提供者

趣旨説明	明官 茂	(国立特別支援教育総合研究所)
研究報告	涌井 恵	(国立特別支援教育総合研究所)
実践報告1	上仮屋祐介 氏	(鹿児島大学教育学部附属特別支援学校教諭)
実践報告2	加藤 公史 氏	(愛媛大学教育学部附属特別支援学校教諭)
実践報告3	浅利 邦子 氏	(千葉県立特別支援学校流山高等学園教諭)
指定討論	丹野 哲也 氏	(文部科学省初等中等教育局特別支援教育課)

司会

武富 博文 (国立特別支援教育総合研究所)

第1分科会では、はじめに本研究所の明官より本分科会の趣旨説明が行われた。その後、研究と実践について上記の4名より報告がなされ、丹野氏より指定討論が行われた。

涌井は、知的障害教育班基幹研究「知的障害教育における『育成すべき資質・能力』を踏まえた教育課程編成の在り方―アクティブ・ラーニングを活用した各教科の目標・内容・方法・学習評価の一体化―」の成果について報告を行った。上仮屋氏は、鹿児島大学教育学部附属特別支援学校における教育課程と、高等部の国語科の授業について報告を行った。加藤氏は、愛媛大学教育学部附属特別支援学校における教育課程と、小学部の生活単元学習の授業について報告を行った。浅利氏は、千葉県立特別支援学校流山高等学園の教育課程と、社会科の授業について報告を行った。丹野氏は、次期学習指導要領の改訂に向けた中央教育審議会の審議を踏まえ、育成を目指す資質・能力やアクティブ・ラーニングの視点に関する説明と、各話題提供に対する総括を行った。

(以上、要項P3-P30参照)

<話題提供者間での協議>

・鹿児島大学教育学部附属特別支援学校に関して

丹野氏：対話的な学びに関する工夫としてどのようなものがあるのか教えてほしい。

上仮屋氏：児童生徒の学習上の特性を考慮し、対話的活動の目的や手順などを明確に示すといった手立てを行うことが、児童生徒の対話的な学びの促進につながると考えている。

・愛媛大学教育学部附属特別支援学校に関して

丹野氏：生活単元学習と教科の目標・内容との関連を教えてほしい。

加藤氏：生活単元学習の授業内容を検討する際に、活動ありきではなく、教科の本質を明確にすることで、生活単元学習の指導と学びの効果が高まると考えている。

丹野氏：ご報告いただいた発表事例に関する中学部へのつながりについて教えてほしい。

加藤氏：小学部までは校内の身近な人との関係性に焦点を当てた学びが中心であったが、中学部では地域における学びといったように授業のねらいの連続性をもたせながら、育ちの段階や年齢にふさわしい内容や場面を拡大させている。

・千葉県立特別支援学校流山高等学園に関して

丹野氏：授業を終えて生徒の変容にはどのようなものがあったか教えてほしい。

浅利氏：生徒の課題意識が身近な校内のことから近隣地域へと広がっていった。

丹野氏：本授業の今後の展開として考えていることがあれば教えてほしい。

浅利氏：生徒の理解について確実に把握するため毎回の授業の評価方法を検討することが挙げられる。

<参加者と話題提供者間での協議>

質問者：(加藤氏に対して)生活単元学習と教科の本質との関連で実施していることがあれば教えてほしい。

加藤氏：日々の授業改善の中で教科の本質を明確にしている。

丹野氏：各教科等を合わせた指導においても、教科の目標を明確にしていくことが大切であり、その際、観点別学習評価を用いることが有効である。

質問者：(加藤氏に対して)子供の目標を設定する際の工夫を教えてほしい。

加藤氏：「子供自身もこれまではできないと考えていたような少し高い課題」の視点から目標を設定し、子供と教師で協働して達成することで、子供が自身の可能性を広げ、より学びが深まることを目指している。

<まとめ>

本日はアクティブ・ラーニングに関する内容を中心に話を行ってきたが、本研究は3つの研究課題から構成されている。各学校では、これらの知見を次期学習指導要領の円滑な実施に活かしてほしい。